

中国語を母語とする日本語学習者における語彙習得研究 —言語間類似性の観点から—

孟 盈

1. はじめに

言語習得とコミュニケーションにおいて、語彙習得の重要性が認められている¹ (e. g., Clark, 1993; Laufer, 1990; Schmitt, 2000; Wilkins, 1972; 畑佐他, 2012)。Wilkins (1972) は語彙習得の重要性が指摘されているが、語彙習得の研究は第二言語学習の心理学の一部であるにもかかわらず、注目されていない (Meara, 1980)。1990年代から、コミュニカティブアプローチの影響²で、語彙習得研究が再び注目されている。近年、コーパスの発展とともに、語彙習得の分野が脚光を浴び、語彙習得に関する研究も蓄積されてきた。

語彙は借用など歴史的なプロセスを経て、類型論的に近い言語間 (例えば、ロマンス諸語に属するフランス語とスペイン語) だけでなく、類型論的に遠い言語間 (例えば、フィンランド語と英語、ポーランド語と英語) にも類似しているものが大量存在している (Ottwinowska, 2016)。一方、日本語と中国語は言語距離の遠い言語であるが、漢字表記や語彙に類似性を持っている。そのため、日本語を第二言語とする語彙習得において、中国語を母語とする日本語学習者 (以下は CNS と略する) における漢語の習得や認知処理に関する研究が多数されている。しかし、CNS における漢字表記を利用した語彙習得研究はほとんどなされていない。日本語と中国語の類似性から考えると、漢語の他に漢字も中国から伝来している。現在においても、日本語の漢字と中国語の漢字に字体に部分的な相違はあるが、意味が類似しているものが多い。なお、中国語において、漢字は意味を持っている最小単位であり、漢字一文字の単音節語もある。そのため、CNS は漢字を手掛かりとして日本語を学習する可能性が高いため、漢字で表記される和語にも焦点を当てる必要がある。本稿は言語間類似性の観点から CNS の語彙習得に関する研究を概観し、CNS に関する語彙習得研究のあり方を探る。

2. 言語間類似性 (Cross-linguistic Similarity) について

人間は物事を学ぶ際に、既存の知識との類似性を探り、繋げようとするのが一般的である。しかし、実際には言語学者は言語間類似性をそれほど重視していないのが現状である。Ringbom (2007) は、言語学習者は主に目標言語と母語あるいは学習者自身

¹ Wilkins (1972) において「while without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed (p. 111)」(文法がなければ、ほとんどが伝えられないが、語彙がなければ、何も伝えられない) と主張されている (筆者訳)。

² Schmitt (2000) が「lexical knowledge is central to communicative competence and to the acquisition of a second language (p. 55)」(語彙知識は、コミュニケーション能力と第二言語習得の中心である) と指摘している (筆者訳)。

が知っている他の言語の間にある類似性を確立することに注目している一方、言語学者は言語間及び言語使用の相違を分析することに焦点を当てていると指摘した。言語学者が言語の異なる特性に注目している理由は、相違性は類似性より、直接的に言語学習や表現力に影響を及ぼすことが多いからである。そのため、言語学者は類似性よりも相違性が多様な言語的変異を引き起こしていることを証明しようとしている(Ringbom & Jarvis, 2009)。しかし、学習者の学習過程を明らかにする学習者の立場に立った研究を行うには、言語間類似性という観点が不可欠である。本節では、言語間類似性の重要な分類である客観的言語間類似性(Objective Cross-linguistic Similarity)と知覚的言語間類似性(Perceived Cross-linguistic Similarity)、知覚的言語間類似性と仮定的言語間類似性(Assumed Cross-linguistic Similarity)の関係性について述べ、次に語彙における言語間類似性の典型例である同根語(Cognate)を説明する。

2.1 客観的言語間類似性・知覚的言語間類似性・仮定的言語間類似性

第二言語習得研究において、初期に提唱された対照分析仮説が習得の難易度を予測できなかった原因の1つは、学習者を分析対象に入れなかった点にある。対照分析は言語構造を対象に母語と目標言語の特性を客観的に分析するが、学習者の主観的判断と一致しないことが多い。言語の形式が類似していても、学習者が認識しやすいものや認識しにくいものがある。そのため、言語間類似性も客観的言語間類似性や知覚的言語間類似性に分けられる。客観的言語間類似性と知覚的言語間類似性は、Ringbom(2007)が言語の形式上や意味上、実際に存在する類似性と、学習者が言語の形式を通して認識できる類似性を区別する際に使用した概念である。また、客観的言語間類似性には対称性があるのに対して、知覚的言語間類似性には必ずしも対称性があるとは限らない。客観的言語間類似性と知覚的言語間類似性は対称性に相違が生じる。これについて、Ringbom(2007)は客観的言語間類似性の観点から考えると、言語Xを母語とする学習者が言語Yに対する理解度は、言語Yを母語とする学習者が言語Xに対する理解度と同じであると考え。しかし、知覚的言語間類似性は、両者の理解度が必ずしも同じではないことを許容すると述べている。知覚的言語間類似性に非対称性も持つ理由に①学習者が言語間に存在している類似性を認識していない、②学習者が言語間に存在している類似性を誤解して理解している、③学習者が類似性のない言語項目に類似性があると判断した(Ringbom, 2007; Ringbom & Jarvis, 2009)という3つが挙げられる。つまり、知覚的言語間類似性は学習者個人的な判断によって異なってくる曖昧なものである。しかし、Odlin(2002)は、言語間の構造か語彙に実際に存在する類似性または相違性が言語転移の要因の一つであるが、言語転移が主に学習者の判断に関わっていると述べ、客観的言語間類似性より知覚的言語間類似性が重要であることを示唆した。

さらに、理解において、学習者は通常、言語間の形式的類似性を探し、形式的類似性を持っている言語項目に意味的類似性があると想定する(Ringbom, 2007;

Otwinowska, 2016)。Ringbom(2007)において、学習者が言語項目間に存在すると想定した意味的類似性のことを仮定的類似性と呼んでいる。そのような学習者が想定した意味的類似性が客観的にも類似している場合、理解度が高くなる。一方、言語項目に客観的言語間類似性のない言語間の場合、学習者は、知覚的言語間類似性が認識できないため、仮定的言語間類似性にのみ依存して、当該言語を理解しようとする。産出において、学習者は表現する内容を具体的な既知の言語形式に符号化する(Ringbom, 2007)。この過程は学習者が目標言語と L1/Ln³の類似性を仮定することに基づく(Otwinowska, 2016)。仮定的類似性は目標言語の産出に役に立つが、産出において誤りの原因の一つでもある。

従来から言われているように、客観的言語間類似性は学習者の習得の難易度を決める要因であり、母語と類似している言語は母語とあまり関係していない言語より習得しやすいことは確かであろう。しかし、知覚的言語間類似性と仮定的言語間類似性は学習者個人の言語学習や言語使用に影響を与えることも明らかとなってきた。学習者の学習過程を研究するには、客観的言語間類似性や知覚的言語間類似性、仮定的言語間類似性という三者ともに考慮に入れて研究する必要がある。

2.2 語彙における言語間類似性-同根語(Cognate)

中国語母語話者のための日本語教育において、文化庁(1978)は約2000語の日本語の漢語と中国語の形態と意味の客観的類似関係について、同形同義語(S語)、同形類義語(O語)、同形異義語(D語)、日本語独自の漢語(N語)と4分類をした。同形同義語と同形類義語は第二言語習得において、同根語(Cognate)の概念に当てはまる。本節では、語彙における言語間類似性と最も関係している同根語について述べる。

語彙における言語間類似性に関係しているものに同根語があると言われている(Ringbom, 2007; Otwinowska, 2016)。同根語は元来歴史言語学で使われる概念であるが、この数十年間、第二言語習得や言語教育の分野にも用いられるようになった。言語間類似性は統語論レベルにおいて構造上、類似性を持っている言語間に用いられる概念であるが、語彙の類似性は歴史的な言語接触や借用を経て、構造上、言語距離の遠い言語間においても、類似している語彙、いわゆる同根語を多数持っている(e.g., Ringbom, 2007; Otwinowska, 2016)ことも珍しくない。例えば、中国語と日本語は異なる語族であるが、漢字が中国から日本へ伝来し、漢字文化圏が形成されて以来、中国語の語彙や日本語の語彙は漢字という媒体で日中の間を交流し、現在に至り、日中両言語において共通している漢字や語彙が多い。

同根語については分野によって、定義も異なっている。歴史言語学や言語接触において、同根語は共通の語源を持つ単語をいう(Otwinowska, 2016)。言語学の研究における語源のほか形式や意味の関係まで言及するものが多い。例えば、Whitley(2002)

³ Lnは第二言語習得だけでなく、第三言語習得、第四言語習得なども含まれている。例えば、第四言語習得ではL1のほか、すでに習得したL2やL3もL4の言語習得に影響を及ぼす。

では、同根語を単語の意味や綴り、形式が類似し、同じ語源から継ぐものであると定義された。第二言語習得において、Ringbom (2007)は「Cognates in two languages can be defined as historically related, formally similar words, whose meanings may be identical, similar, partly different or, occasionally, even wholly different (p. 73)」(二言語における同根語は、歴史的な関連を持ち、形式上に類似した単語であると定義できる。同根語の意味関係は一致する、類似する、部分的に異なる、偶然的に全く異なるという4つの関係に分けられる)と述べ(筆者訳)、言語学者の定義と比べ、形式の類似性だけに焦点を当てている。その理由として、Jarvis (2009)は学習者が同根語、借用語、あるいは偶然に形式が類似しているだけの関係のない語について区別がほとんどつかないと述べている。単語を学習するにはまず形式から判断するため、実際に「同根語」であるかどうかは分からない可能性が高い。Otwinska (2016)はポーランド語や英語の同根語学習を研究する際に、さらにその言語の綴り規則や音韻規則、形態統語論的規則に従うため、形式や意味は必ずしも一致している必要がないという内容を同根語の定義に新しく加えた。日本語に漢字で表記する和語がある。和語はある漢字の訓読みを指す(沖森他, 2011)ため、Ringbom (2007)とOtwinska (2016)の定義に従うと、日中の漢字を同根として扱うことができると考えられる。

同根語は形式や意味に類似性を持つため、学習負担が軽くなる。Nation (2013)において、ある単語が母語の借用語であり、概ね同じ意味を持ち、類似している文法パターンに当てはまると、その単語の学習負担が相当軽くなると述べている。目標言語の単語が母語の綴りパターンに類似すればするほど、簡単に学習し、忘れられにくいと主張されている。一方、学習者が形式から、同根語を判断するには誤ちを犯すリスクがある。実は見せかけの(Deceptive)同根語もある。Ringbom (2007)において、形式や意味の類似性から、同根語(形式や意味が類似している語彙; 日本語の「雑誌」と中国語の「杂志」)、不完全な同根語(形式が類似しているが、意味的に一部重ねている語彙; 日本語の「了解」と中国語の「了解」)、見せかけの同根語(形式が類似しているが、意味的に違う語彙; 日本語の「手紙」と中国語の「手紙」と3つに分けられている。括弧内に挙げた例のように、形式上、日本語の語彙と中国語の語彙と完全に同じであるが、意味上に差異が生じるものがある。日本語の漢語において、CNSにとって、不完全な同根語⁴の習得が最も難しい(加藤, 2005a)。

以上、本節は言語間類似性や同根語について述べた。学習者は言語間類似性に基づき、言語を運用するが、学習者が認識した言語間類似性と言語間が持っている客観的類似性は必ずしも一致しないため、両方研究する必要がある。日中同根語の処理メカニズムに関する研究は心理言語学の分野において多くされている(e. g., 邱, 2002; 邱俞瑗, 2007; 邱, 2010; 邱, 2012; 蔡・松見, 2009; 蔡他, 2011; 松見他, 2012)ため、

⁴ 加藤(2005a)において、文化庁(1978)の分類に従っているため、本稿でいう不完全な同根語を同形類義語(0語)と呼ぶ。

同根語という用語も上記の研究において使用されている。日中同根語の定義は語源的な要素を重要視しているため、日中同形の二字漢語を同根語とすることが一般的である。しかし、Ringbom(2007)による同根語の定義から、学習者が同根語であるかどうかを判断する際に、語源で判断するわけではなく、形式上に類似しているかどうかで判断することが分かった。つまり、CNS が形式から同根語を判断する場合、漢語の同形語の他、漢字で表記される和語も同根語であると認識する可能性が高い。さらに、中国語において、漢字が意味を持っている最小単位であるため、CNS が平仮名漢字交じりの和語に含む漢字から語彙の意味を推測できる。仮名漢字交じりの和語も同根語であると判断する可能性があると考えられる。

3. 日本語の語種と日本語表記

中国語と日本語は語族が異なっているが、中日辞典において、中国語の語幹・語基を利用した借用語は日本語の 50%以上を占めている(松見他, 2006)。本節では言語間類似性の観点から、日本語の語種や日本語の表記と CNS の語彙習得の関わりについて述べる。

3.1 日本語の語種

日本語では、語種によって、和語、漢語、外来語、混種語に分けられている。日本語の語種について、斎藤(2011)は「日本語では、語種の単語の出自による違いを、伝統的に(人種になぞらえて)『語種』と呼んでいる(p. 38)」⁵。つまり、本来、語種とは語源的な概念である。和語が日本語固有の「大和ことば」であり、漢語が中国語から輸入してきた語彙であると言える。しかし、秋元(2002)では、「漢語」について「字音語と言われるように、漢字で書かれ音読みで読まれる語をいう⁵。従って、『天地』、『降雨』など中国から入ってきた語ばかりでなく、それをまねて日本で造られた和製漢語も含まれる」と述べられている。つまり、現在の漢語は、昔の語源的な分け方から、読み方や表記を基準としていることが分かる。漢字で書かれ、音読みで読まれる語が漢語とされているということである。それに対し、漢字か仮名で表記され、訓読みで読まれる語が和語と定義される。

3.2 日本語表記

世界の文字を分類すると、大きく表音文字(phonographs)と表語文字(logogram)に分けられる。表音文字は語の音だけをさすもの(沖森他, 2011)であるのに対して、表語文字は語の音と意味を表すものであり、代表的なものは漢字である。表音文字は、さらに、アルファベットのような単音だけを表す音素文字や日本語の仮名のような音節を直接表す音節文字に分けられる(沖森他, 2011)。

⁵ 「チャーハン」「ラーメン」などカタカナ表記が一般となる語彙について、語源が中国語ではあるが、本稿は秋元(2002)の定義に従うため、漢語ではなく、外来語であると判断する。

日本語は、英語などの世界の多くの言語が通例1つの文字システムしか持たないのに対して、表語文字の漢字、表音文字の仮名やローマ字という3種類の文字を併用する珍しいシステムである(門田, 2004)。さらに、一語に漢字か仮名の片方を使用するのではなく、語幹を漢字で、語尾を仮名で表し、漢字と仮名が交じる語も少なくない。一般的に、漢語は漢字表記で表し、和語は仮名、漢字、平仮名漢字交じりで表す。

3.3 日本語の語種や日本語の表記と CNS の語彙習得の関わり

前節の内容から、学習者が言語間類似性に基づき、言語学習や言語使用を展開することが分かった。この観点に従えば、CNS の日本語語彙習得も母語である中国語の知識に基づくことが考えられる。

印欧語族において、語と語の分かれ書きや豊富な変形から、語が容易に認識される一方、中国語においては、個々の音節が独立し、音節ごとに漢字で表されている(張他, 2006)ため、CNS にとって、漢字は単位として自然に見分けやすい(王, 2006)。そのため、中国語において、語は漢字一字か複数の漢字で表される(周, 2003)。例えば、一字語彙は「牛(牛)」「猫(猫)」「吃(食べる)」「抱(抱く)」などのような漢字一字が単独で意味を表すものがある(括弧内は日本語訳)。多字語は、「甸甸(甸甸)」「叮当(カチンカチン)」などのような漢字一字で独立して使用できず、二字か二字以上に依存して意味を表す連綿語や、「巧克力(チョコレート)」「沙发(ソファ)」のような音訳外来語、「人民(人民)」「朋友(友達)」「音乐家(音楽家)」などのような合成語がある。言語間類似性の観点から、学習者は形式上の類似性を先に認識することから、「牛」「猫」「人民」のような日本語と中国語が類似している語彙と「抱く」「食べる」のような一部が類似している語彙が気付きやすいと推測できる。これらの語の中で、「牛」「猫」の語種は和語であり、「人民」が漢語である。

つまり、今まで多数研究されてきた二字漢語のほか、漢字表記を持つ和語や混種語(例えば、日本語の「場所」と中国語の「場所」)も知覚的言語間類似性を持っている。CNS は語種で語彙の類似性を判断するより、漢字表記の類似性で判断している可能性があると考えられる。以下4節で日中対照研究の分類に基づいた漢語の習得研究を整理し、漢字表記の語彙習得への影響に関する研究をまとめる。

4 CNS における漢語や漢字表記語の習得に関する先行研究

日中の語彙対照研究において、漢語に関する研究が圧倒的に多い。そのため、CNS に関する語彙の習得研究も対照研究の成果を踏まえて行われてきた。本節において、CNS の漢語習得や漢字表記の語彙習得への影響を追求した研究を概観する。

4.1 CNS における漢語の習得に関する研究

文化庁(1978)が日本語の漢語と中国語の形式や意味の関係から分類してから、「漢語や日中同形語に関する研究のほとんどは記述的研究であり(加藤, 2005a, p. 97)」、2000年以降から、第二言語習得理論に基づいた習得研究が行われるようになってきた

(小森, 2016)。代表的なものに、加藤(2005a)、小森他(2012)、小森他(2014)が挙げられる。

加藤(2005a)は文化庁(1978)の分類に従い、漢語を同形同義語(S語)、同形異義語(D語)、同形だが日中語間で意味にずれのある語(O語)、日本語にしか存在しない漢語(N語)に分類し、豪州在住のCNSを対象としてこの4つのカテゴリーの習得過程の違いについて調査を行なった。調査方法は正誤判断テストである。テストの内容は正の転移と負の転移を両方考察できるように、O語とD語を使用した問題文を正用文と誤用文に分けて作成し、S語とN語を用いる問題文を正用文に作成した。その結果、S語において、使用頻度の低い語であっても、CNSは中国語の知識を利用し、正の転移より推測できることが明らかとなった。N語は中国語に存在していない語であるが、漢字知識を利用して正の転移が起こり、意味を正しく推測できる語もある。D語は初中級の未習者に中国語の負の転移による誤用が出やすいが、上級の既習者に負の転移の影響はあまり出ない。また、O語は上級でも習得されていない場合があることが分かった。このように、加藤(2005a)は言語を対象とする日中対照研究ではなく、学習の主体である学習者を取り上げ、正の転移や負の転移の両方からCNSの漢語習得を実証的に研究することに意義があると言えよう。

さらに、小森他(2014)は加藤(2005a)の結果を踏まえ、CNSにおけるO語、D語、N語の習得について、選択問題を用いて調査を行った。特に小森他(2014)において、調査内容は加藤(2005a)で取り上げた漢語だけではなく、「語種や音訓にも関わらず、漢字で表記された語を“漢字語”と呼び(小森, 2014, p. 3)」、出題語に入れた。その結果、N語は語彙知識の増加につれ、正しく習得できる傾向であるのに対して、O語とD語は語彙知識が増えても、中国語の独自義が日本語に転移しやすいことが明らかとなった。この結果も加藤(2005a)を支持しており、対象人数も出題数も増えているため、この結果は一般化できると考えられる。語彙や音訓にこだわらずに、漢字で表記された語も研究範囲に入れたことも、学習者の視点に近づいた研究だと言えよう。

漢語と漢字表記された語に関連した実証研究に小森他(2012)がある。小森他(2012)では、正誤判断テストでS語と一字共通の和語の共起語について調査している。例えば、日中の同形語の「整理」に対応する和語として「整える」があり、「整」という表記も共通している。しかし、中国語において、「整理头发(髪を整える)」は言えるが、日本語では「髪を整理する」は使わずに、漢語に対応する和語の「髪を整える」を使用する。このようなS語と一字共通の和語の共起語に対する正誤判断テストの結果、中国語と同じ連語形式の場合、漢語と和語と両方とも高い正答率が得られ、中国語の連語と異なる場合には、漢語も、和語も、正答率が低い傾向が示された。つまり、CNSは日中同形語や一字共通の和語に類似していると判断する傾向がある。すなわち、CNSの語彙習得において、語種ではなく、漢字表記が働いていることが窺える。

以上、CNSの漢語に関する実証研究を整理した。研究の流れは、最初の対照研究の成果を踏まえた漢語から、漢字表記で書かれた二字漢字語や漢字表記の和語にまで発展してきた。つまり、語彙習得研究もCNSという特定集団が認識する言語間類似性に

注目しつつあることが窺える。

4.2 漢字表記が CNS の語彙習得に及ぼす影響

陳(2009)では、日本語の漢語「既婚」を例に挙げ、中国語に存在しない日本の漢語を分解し、漢字知識を利用して意味を推測することが指摘されている。また、漢語だけではなく、和語について、張(2011)は漢字で表す和語は漢字の意味が中国語と共通していることによって、学習者は意味推測に成功しやすいと述べている。漢字表記が CNS の語彙習得に重要な役割を果たしていることが考えられる。漢字表記に関わる習得研究として加藤(2005b)と小森(2012)が挙げられる。

加藤(2005b)は Kellerman が提唱した言語転移の可能性を援用し、中国語の「開」と「看」が日本語の「開ける」と「見る」の習得への影響について、受容と産出の両面から考察した。受容面は正誤判断テストで調査し、産出面は発話テストで調査した。具体的に中国語の「開」「看」の用法の典型度が日本語の「開ける」と「見る」への転移に影響するかどうかを調査した。正誤判断テストでは、L1 の典型度と転移率に有意な相関が見られなかったが、発話テストでは、学習者の L1 における典型度の高い用法が転移しやすく、典型度の低い用法が転移しにくかったことが分かった。Ringbom(2007)において、転移と類似性の関係について、転移は類似性を利用した結果であると述べられている⁶。加藤(2005b)で挙げられる中国語の「開」と日本語の「開ける」、中国語の「看」と日本語の「見る」の転移も学習者が言語間類似性に気付いたことを前提にしている。Kellerman(1983)においても同根語を容認する学習者の知覚力が重要であると述べられている。

小森(2012)はテキストの漢語や和語の含有率をコントロールし、中国語を母語とする日本語学習者に読解テストを実施した。その結果、漢語と和語(漢字)、和語(かな)の含有率によって、テキストへの理解が初級、中級レベルまでの学習者にまで影響を及ぼしている一方、日本語能力試験1級程度以上の上級、超級レベルでは、その影響がほとんどないことを示した。小森(2012)は漢語のほかにも、和語にも焦点を当てた点が有意義である。ただし、小森(2012)では、学習者がテキストの出現語をどの程度習得しているか、また、学習者は漢語か和語の漢字表記から意味まで正確に推測できるかについては調査していないため、CNS の知覚的言語間類似性を明らかにするにはさらなる調査が期待されている。

本節は CNS における漢語の習得研究や漢字表記に関する習得研究をまとめた。研究の流れとして、漢語の日中対照研究に基づいた習得研究から、漢字表記の客観的類似性を重視する習得研究へ進んでいることが分かった。2節で述べたように、客観的言語類似性は言語習得の要因の一つであるが、知覚的言語間類似性が学習者個人の言語

⁶ Ringbom(2007)は「Transfer as a communication process is the use of perceived and assumed cross-linguistic similarities in L2 comprehension and L2 production (p.26)」(コミュニケーション過程としての転移は、L2 理解と L2 産出における知覚的言語間類似性や仮定的言語間類似性の使用である)と述べられている。

学習や言語運用に関わる重要な要素である。そのため、CNS に関する知覚的言語間類似性についてさらに研究する必要がある。

5 理解と産出における語彙の言語間類似性の働き

4 節で整理したように CNS における漢語や漢字表記の習得研究では、語彙の知識を測る研究が多いが、管見の限り、実際の語彙運用から考察する研究は小森(2012)しかない。一方、Ringbom(2007)において、言語間類似性の働きについて理解と産出を分けて見る必要があると提唱されている。本節において、理解と産出における語彙の言語間類似性の働きを区別し、それに関する CNS における日本語の語彙習得の先行研究を整理する。

Nation(2013)において「Knowing a word(語を知ること)」の「form(形式)」「meaning(意味)」「use(使用)」の三つの側面をさらに「receptive(受容的)」「productive(産出的)」に分けている(筆者訳)。受容的は、聞くことや読むことによって、他人からのインプットを受け取り、それを理解しようとする考えである一方、産出的は、私たちが話すことと書くことによって、他の人に情報を伝えることである⁷(Nation, 2013)。つまり、受容は形態から意味への過程である一方、産出は概念計画を作成し、対応する意味を経て形態へ進む過程ということである。この二つの過程は当然異なる過程であり、非対称性を持っている。Ringbom(2007)において、理解は接近性(approximate)を持っているのに対して、産出は正確性(precise)を求めると述べられている。すなわち、理解はコミュニケーションの状況や文脈から推測する場合が多く、内容の枝葉まで全て理解することがほとんど要求されていない。産出は創造的な過程であり、理解過程のような文脈からの推測などのストラテジーが含まれず、目的や内容を明確に表現する必要がある。理解と産出は元来、異なる過程であるため、理解するための学習と産出するための学習も異なる(Ringbom, 2007)。一般的に、受容的学習と使用は産出的学習と使用より簡単である(Nation, 2013)。また、言語間類似性が L2 理解や L2 産出への働きも理解や産出の非対称性によって異なっている(Ringbom, 2007)。理解において、形態上の類似性が学習者に認識されると、意味上の連想も働く。それに対して、産出は概念計画を作り、最も相応しい意味を探し、形態を当て嵌めるため、形態上の類似性が直接産出に結びつかない。そのため、言語類似性のある言語は産出と比べ、理解に特に有利とされている。Ringbom(2007)においても、一般的に理解と産出には多様なギャップがあるが、L1 と類似性のない L2 は理解と産出のギャップが小さいと述べている。

CNS における語彙知識の運用においては、理解と産出を比較する研究がほとんどされておらず、理解の方式による差異を研究するもののみがある。小森他(2004)と三國

⁷ Nation(2013)における英文原文は「Receptive carries the idea that we receive language input from others through listening or reading and try to comprehend it. Productive carries the idea that we produce language forms by speaking and writing to convey messages to others (p. 46-47)」である。

他(2005)は CNS の語彙知識が文章理解と聴解へ及ぼす影響について調査を行った。三國他(2005)は聴解の理解における語彙知識に及ぼす影響と小森他(2004)の文章理解における語彙知識に及ぼす影響を比較し、語の認知が音声より形態からの方が優勢であり、音声から意味へのアクセスが効果的に機能していないと述べている。日本語能力試験の結果分析からも同じ結果が窺える。『日本語能力試験の概要 2003 年版』によれば、中国語系の受験者が全級において「文字・語彙」の得点が高く、「聴解」が最も低かったと述べられている。これに対して、ヨーロッパ系と太平洋系が全級で「聴解」の得点が目立って高く、「文字・語彙」が低かったと述べられている。小森(2005)では、文章理解と聴解の理解において、同根語と非同根語の処理過程が異なっていることが分かった。CNS は書字表象に頼っているため、文章理解に同根語の書字表象からの意味処理が強い一方、聴解において、書字の情報がないため、同根語であるにも関わらず、音韻表象から意味表象への認知処理が弱いと示唆されている。

以上の先行研究から、CNS における語彙知識の運用に関する研究は文章理解と聴解との理解度の差異に偏っていることが分かった。その原因は、欧米諸言語は表音文字であるため、同根語の音韻や正書法の両方が類似しているの多いが、日本語と中国語の場合は、正書法が類似しているが、音韻に関係ないものが多数を占めているからである。今後、理解過程の他に、理解と産出の相違から、CNS における語彙の言語間類似性が実際に理解と産出にどう働いているかを明らかにする研究が必要である。

6 言語間類似性観点から見た語彙習得研究の今後の方向性

本稿において、言語間類似性の観点から、CNS の語彙習得に関する研究を概観した。言語間類似性において、客観的言語間類似性は言語習得の難易度を定める要素であるが、知覚的言語間類似性は学習者個人の言語運用に関わる要因である。類似性は学習の基礎と言われているため、いかに類似性を利用し、語彙の習得に役立たせるかは CNS の習得過程の究明や CNS のための語彙教育のフィードバックに重要である。しかし、CNS における言語間類似性に関する先行研究は、客観的言語間類似性に関する研究が多く、知覚的言語間類似性に関する研究がほとんどなされていないのが現状である。さらに、客観的言語間類似性に関する研究では、日中対照研究に基づいた漢語の習得研究が多いが、中国語の漢字の性質や CNS の語彙習得特性を考慮した漢字表記に関する語彙習得研究が少ない。今後は中国語と日本語の漢字表記の類似性を調査し、CNS が漢字表記を利用して語彙を学習する実証研究が期待される。

また、言語間類似性は言語の理解や産出への働きが異なっている。しかし、CNS における言語間類似性に関する語彙知識の運用研究に、理解の方式(文章理解と聴解)による言語間類似性の働きの相違を考察する研究が多く、言語間類似性に関する理解と産出の両方を検討する研究が不足している。今後、CNS における語彙の言語間類似性が実際に理解と産出にどう働いているかを明らかにする研究が望ましい。

そして、4 節で挙げられた語彙習得に関する実証研究は量的研究であり、調査方法が正誤判断テストや選択肢問題に限られている。今後の習得研究は調査目的に応じて

多様な調査方法の開発が必要となると考えられる。Waring(2002)は、テストが必ずしも測ろうとする内容を測るものではないと指摘している。例えば、受容的語彙知識を測る目的で作成した多肢選択式問題は、受容的語彙知識以外の知識が測られ、受容的語彙知識の意味の独立想起(unassisted recall of meaning)など重要な側面が測られなくなる。そのため、Waring(2002)は学習者の自己報告(self-report)⁸がテストの複雑性を避けるという利点や、翻訳テストや語彙レベルテスト(Vocabulary Levels Test)などの伝統的なテストと高い相関が見られることから、学習者の自己報告を提唱している。知覚的言語間類似性に関する研究は学習者の立場に立つ必要があるため、伝統的なテストのほか、自己報告など学習者の意識調査を活用する実証研究も必要になるであろう。

参考文献

- 秋元美晴(2002)『よくわかる語彙』アルク。
沖森卓也・笹原宏之・常盤智子・山本真吾(2011)『図解日本の文字』三省堂。
加藤稔人(2005a)「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い」『日本語教育』125, 96-105。
加藤稔人(2005b)「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、言語転移理論の観点から」『第二言語としての日本語の習得研究』8, 5-23。
門田修平編著(2004)『英語のメンタルレキシコン』松柏社。
邱學瑾(2002)「台湾人日本語学習者における日本語漢字熟語の処理過程—日・中2言語間の同根語と非同根語の比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』51, 357-365。
邱學瑾(2010)「日本語学習者の日本語漢字語彙処理のメカニズム—異言語間の形態・音韻・意味の類似性をめぐって」『日本語教育』146, 49-60。
邱學瑾(2012)「漢字圏日本語学習者における日本語単語の意味処理に及ぼす母語の影響」『教育心理学研究』60, 82-91。
邱俞媛(2007)「台湾人日本語学習者における日本語単語の聴覚的認知—同根語・非同根語・ひらがな単語・カタカナ単語の比較」『日本語教育』132, 108-117。
国際交流基金(2004)『日本語能力試験の概要 2003年版年度試験結果の分析』日本国

⁸ Nation(2013)ではWaringの自己報告を具体的に次の5つのカテゴリーに分けられている。(筆者訳)
A. I understand this word and I know how to use it. (私はこの単語を理解し、使い方も分かる。)
B. I understand this word but I don't know how to use it. (私はこの単語を理解しているが、使い方が分からない。)
C. I think I understand this word and I know how to use it. (私はこの単語を理解し、使い方も分かると思う。)
D. I think I understand this word but I don't know how to use it. (私はこの単語を理解しているが、使い方が分からないと思う。)
E. I do not know this word. (この単語は分からない。)

際教育協会.

- 小森和子(2005)「第二言語としての日本語の文章理解における第一言語の単語認知処理方略の転移—視覚入力と聴覚入力の相違を中心に—」『横浜国立大学留学生センター紀要』12, 17-39.
- 小森和子(2012)「漢語と和語の比率の違いが中国人日本語学習者の文章理解に及ぼす影響」『明治大学国際日本語学研究』4(1), 1-18.
- 小森和子(2016)「中国語話者の語彙習得とその指導」『日語教学研究』pp. 200-221, 外语教学与研究出版社.
- 小森和子・三國純子・近藤安月子(2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み」『日本語教育』120, 83-92.
- 小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子(2012)「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得—中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較」『小出記念日本語教育研究会論集』20, 49-60.
- 小森和子・玉岡賀津雄・斉藤信浩・宮岡弥生(2014)「第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察」『中国語話者のための日本語教育研究』5, 1-16.
- 斎藤倫明・石井正彦編(2011)『これからの語彙論』ひつじ書房.
- 蔡鳳香・松見法男(2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討」『日本語教育』141, 14-24.
- 蔡鳳香・費曉東・松見法男(2011)「中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討」『広島大学日本語教育』21, 55-62.
- 陳毓敏(2009)「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案—意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して」『日本語科学』25, 105-117.
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁(2010)『第二言語習得研究 理論から研究法まで』研究社.
- 松見法男・邱學瑾・桑原陽子(2006)「語彙の習得」『講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理』pp. 161-183, スリーエーネットワーク.
- 松見法男・費曉東・蔡鳳香(2012)「日本語漢字単語の処理過程—中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討」『第二言語習得研究と言語教育』pp. 43-67, くろしお出版.
- 張麟声(2011)『中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社.
- 松本順子・堀場裕紀江(2007)「日本語学習者の語彙知識の広さと深—中国語母語話者と日本語母語話者の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』10, 10-27.
- 三國純子・小森和子・近藤安月子(2005)「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響—読解との比較から」『日本語教育』125, 76-85.

- 畑佐由紀子(2012)「語彙と習得総論」『第二言語習得研究と言語教育』pp. 2-22, くろしお出版.
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局.
- Ard, J., & Homburg, T. (1983). Verification of language transfer. In S. Gass & L. Selinker (eds) *Language Transfer in Language Learning*, pp. 177-201. Rowley, MA: Newbury House.
- De Groot, A. M. B., & Hoeks, J. C. J. (1995). The development of bilingual memory: Evidence from word translation by trilinguals. *Language Learning*, 45, 683-724.
- Jarvis, S. (2009). Lexical transfer. In A. Pavlenko (ed.) *The Bilingual Mental Lexicon Interdisciplinary Approaches*, pp. 99-124. Bristol: Multilingual Matters.
- Kellerman, E. (1983). Now you see it, now you don't. In S. Gass and L. Selinker (ed.) *Language Transfer in Language Learning*, pp. 112-134. Rowley, MA: Newbury House.
- Laufer, B. (1990). Why are some words more difficult than others? Some intralexical factors that affect the learning of words. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 28, 293-307.
- Lewis, M. (2000). Introduction. In M. Lewis (ed.), *Teaching Collocation. Further developments in the lexical approach*. Hove. Language, pp. 8-9. Teaching publications.
- Nation, I. S. P. (2013). *Learning Vocabulary in Another Language*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odlin, T. (2002). Language transfer and cross-linguistic studies: Relativism, universalism, and the native language. In R. B. Kaplan (ed.) *The Oxford Handbook of Applied linguistics*, pp. 253-261. Oxford: Oxford University Press.
- Otwinowska, A. (2016). *Cognate Vocabulary in language Acquisition and Use: Attitudes, Awareness, Activation*. Multilingual Matters.
- Ringbom, H. (1987). *The role of the First Language Learning*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Ringbom, H. (2007). *Cross-linguistic Similarity in Foreign Language Learning*. Multilingual Matters.
- Ringbom, H., & Jarvis, S. (2009). The importance of cross-linguistic similarity in foreign language learning. In M. H. Long and C. J. Doughty (eds) *The Handbook of Language Teaching*, pp. 107-118. Blackwell Publishing.

- Waring, R. (2002). Scales of vocabulary knowledge in second language vocabulary assessment. *Kiyo, The occasional papers of Notre Dame Seishin University*, 26, 1, 40-54.
- Wilkins, David A. (1972). *Linguistics in Language Teaching*. London: Edward Arnold.
- Whitley, M. S. (2002). *Spanish/English Contrasts: A Course in Spanish Linguistics*, Washington, DC: Georgetown University Press.
- 王骏(2006). 字本位与认知法的对外汉语教学. 华东师范大学博士学位论文.
- 张珊珊, 赵仑, 刘涛, 顾介鑫, 杨亦鸣(2006). 大脑中的基本语言单位—来自汉语单音节语言单位加工的 ERPs 证据. *语言科学*, 5(3):3-13.
- 周荐(2003). 论词的构成、结构和地位. *中国语文*, 2:148-155.

(もう えい・首都大学東京大学院博士後期課程)